

女子大國文 第百六十四号 平成三十一年一月三十一日

二〇一八年度公開講座

軍記史の終章まで

笹川祥生

実在した合戦の経緯、ならびにその合戦（前後の時期を含む）に関わる人々の行動と心情、それらを含む社会の状況を主な話題とする。本稿で取扱う「軍記」は、右条件に該当する作品をいう。

（一）前史の時期

『古事記』（和銅五年七二成立）や『日本書紀』（養老四年七二〇成立）『続日本紀』（延暦十六年七九七成立）『日本三代実録』（延喜元年九〇一成立）など、古代歴史書にも合戦描写はある。いずれも数ある事件の中での一つであり、全体の中心にある話題として採録されているわけではない。

また、記事は概ね事件の要旨を述べるに留まり、関係者の行動・心情の詳細に及ぶことは少ない。次に一例を示す。

○筑紫君石井、天皇の命に従はずして、多く礼无かりき。故、物部荒甲の大連、大伴の金村の連二人を遣はして、石井を殺したまひき。『古事記』下。日本古典文学大系

○（継体紀二十一年夏。筑紫国造磐井、新羅と結び叛く。二十二年十一月十一日）大將軍物部大連鹿鹿火、親ら賊の帥磐井と、筑紫の御井郡に交戦ふ。旗鼓相望み、埃塵相接けり。機を両つの陣の間に決めて、万死つる地を避らず。遂に磐井を斬りて、果して疆場を定む。『日本書紀』十七。日本古典文学大系—以下「大系」と略記

*「旗鼓相望み」→「地を避らず」の表現は、『芸文類聚』所収の文に拠る（大系頭注にも指摘）。「若使旗鼓相望。埃塵相接。決機兩陣之間。不辭万死之地」（卷五十九、武部、将帥）。中国の文章表現を借用する例は戦闘場面だけでなく、全編にわたって見られる。

○（天智紀二年八月二十八日。前日、日本の水軍と唐の水軍が戦い、「日本不利けて退く。」）日本の諸将と、百済の王と、氣象を觀ずして、相謂りて曰はく、「我等先を争はば、彼自づからに退くべし」といふ。（日本船団、唐船団に夾撃される）須臾之際に、官軍敗続れぬ。水に赴きて溺れ死ぬる者衆し。艫舳廻旋すること得ず。朴市田来津、天に仰ぎて誓ひ、齒を切りて嘔り、数十人を殺しつ。焉に戦ひ死せぬ。『日本書紀』二十七。大系

*登場人物の個別の言動を、磐井討伐の記事に比べて詳しく描く。この他、『日本書紀』二十八に記す近江国瀬田の合戦（壬申の乱の決戦となった）を描く記事なども、筆者がかなり力を込めて執筆したと認められる。文章表現に関し、やがて単独の作品としての「軍記」が出現する基盤は出来つつあった、ということであろうか。

『古事記』→六国史成立の時期には、右に注記したとおり、合戦記事は存在した。独立した作品が未成立で、軍記史上、前史の時期と区分する。

(二) 初期軍記

(ア) 『将門記』

『竹取物語』が「物語の出で来はじめのおやなる竹取の翁」と紹介された『源氏物語・総合』、新大系（底本は大島本）ことになぞらえるなら、『将門記』は「軍記の出で来はじめのおや」である。

書名については、『将門合戦章』あるいは『将門合戦状』の名を、『扶桑略記』（『日本古典文学大辞典』に「記事の終る寛治八年（一〇九四）以降、堀河天皇の没した嘉承二年（一一〇七）以前の成立とみられる」「飯田瑞穂」）以下中世の文献が記す。

○（天慶二九三・一二・十五）将門遷^一上野国^一。〈中略〉且行^一諸国除目^一。賊主将門恣行。合戦章云。下野守平将頼。将門舍弟。上野守多治経明（略）又左右大臣。納言参議。文武百官。六弁八史。皆以点定。但所^レ闕曆博士耳。『扶桑略記』^{廿五} 新訂増補国史大系12)

○（同三・二・八）合戦章云。現有^二天罰^一。自中^二神鐸^一。其日。将門伴類被^二射殺^一者一百九十七人。〈後略〉（同右）

○将門合戦章云于^レ時寄^二中有之使^二所^一告^レル消息^三云^ク『言泉集』九 古典文庫639 澄憲（建仁三年一二〇三没。古典文庫629『澄憲作文大躰』解題『畑中栄』に「澄憲伝」原著、聖寛（文暦二年一二三五没）の増補。）

○承平将門之。東八箇国ヲウチトリテ。十万人ヲコロシタル。タ、カヒニ勝カタメニ。金光明経ヲカキ。供養スヘキ願ヲ立タリケリ。此願ニヨリテ。地獄ニヲチテ後。タ、カタトキノヤスマリアリト。ヒトノユメニミエタリト。将門之合戦状ニミエタリ。『宝物集』一卷本。続群書類従雑部所収。康頼が鬼界が島から帰洛（『平家物語』諸本には治承三年一二七三月とする。『宝物集』諸本は二年とするが——一卷本はその部分欠——、おそらく誤記）の後、あまり年月を経ない時期の執筆（おそらく一卷本）であろう。

○（元久元二二〇四・十一・二十六）将軍家（＝実朝）日来仰^二画工^一於^二京都^一被^レ図^二将門合戦絵^一。今日到来。掃部頭入道（＝中原親能）所^二調進^一也。二十ヶ卷。納^二時絵横^一。殊御自愛^二云々^一。『吾妻鏡』

軍記史の終章まで

○(寛元三二四五・十・十一) 日来於^二京都^一。以^二平将門合戦状^一。被^レ令^二画^三図^二之^一。去夕参着之間。今日。於^二将軍(『頼嗣御方』。大殿(『前将軍頼経』 覽^レ之。教隆(『清原氏』 讀^二申其詞^一。事終有^二御酒宴^一。武州(『執権経時』 経営云々。(同右)

○将門合戦状云 始伯父平良兼与将門合戦次被語平真樹承平五年二月与平国香并源護合戦『歴代皇紀』—古称は『皇代曆』あるいは『皇代略』—朱雀天皇。改定史籍集覧十八。室町初期には卷一―三(神代―後鳥羽)が伝存。四・五(高倉―後土御門)は後補右諸文献にう「将門合戦状」などの称は、いわゆる『将門記』の原名あるいは古称に当るのか。疑問も呈されているし、その疑問は尤もなことである。たとえば、『宝物集』に記す「将門之合戦状」は、「将門の『合戦状』」なのかもしれない。『藤原家伝』が本来は『家伝』であるように。

○前掲の書(『扶桑略記』他) 中の引用名称は、どれほど原名を忠実に伝えたものか実は疑問なのである。『扶桑略記』の例をみよう。この書は諸書の引用例が多いことで知られているが、記載された引用書名が原名に忠実でない場合が多いということも、また学界周知の事実といつてよいであろう。試みにそのいくつかの例をあげると、『陸奥話記』を「奥州合戦記」、『日本霊異記』を「景戒記」「異記」、(下略)(林陸朗『新訂将門記』解説。古典文庫67。現代思潮社。昭和五七)

『将門記』の原名・古称などの推定は本稿の予定するところではなく、論及を措く。そもそも、この作品の成立した平安時代初期には、書名の固定に、後世ほどの関心もなかったらしいという実情もある。

さて、この作品(以後現行書名に従い、『将門記』と記す)は、平安初期に關東で勃発した数々の合戦の経過と、その前後の状況を記す。また、将門は足かけ六年にわたる關東における争乱の中心人物―主役として描かれる。この合戦(前後の状況を含む)を主な材料とし、作品の中での主役を設定する。以後の「軍記」に分類され得る作品の、根幹を為す部分である。実際には、時期・規模・地域など、争乱とその参加者を包む事情、また作者の認識・構想の相違など、作品形成の条件により、さまざまな変形―たとえば主役が交替するとか―濃淡は発生する。

さらに、『将門記』の特色として、「地方」への情動的傾斜を指摘しておく必要がある。『将門記』の作者については、在地作者（＝東国居住の作者）説と在京作者（＝京都居住の作者）説とが、それぞれ主張されてきた。また、梶原正昭氏の整理のとおり、その折衷説（同氏『将門記2』解説。東洋文庫²⁹¹ 一九七六平凡社刊。渥美かをる氏の原初本現地成立・増補本京都成立説など）も唱えられた。現在のところ、正解には未だ到らず、の感がある。

将門は叛乱の主導者であり、通常非難され易い立場にある。『将門記』にも将門非難の言辭は（勿論、というべきか）ある。

○（平貞盛は）官符を懷きて相糺すと雖も、而も件の将門いよいよ逆心を施して、ますます暴惡をなす。『将門記』。古典文庫本『新訂将門記』の読み下し文による。以下特記なき時は古典文庫本による

○（詔に「将門濫惡を力となして国位を奪はんと欲す」。朝廷諸社寺に「邪滅惡滅の法」「頓死頓滅の式」などの祈祷を行わせる）天神は嘯嗷して、賊類非分の望みを謗り、地類は呵嘖して、惡王不便の念ひを憎む。

○時に、現に天罰ありて、《略》新皇は暗に神籬に中りて《略》独り蚩尤の地に滅しぬ。《略》私に勢を施して将に公徳を奪はんとす。○不善を一心に作して、天位を九重に競ふ。過分の辜、則ち生前の名を失ひ、放逸の報、則ち死後の魄を示す。

ところが夙に先学の指摘されるとおり、将門への共感を示す表現も再三用いられる。

○（男子数名を将門に害された、と前常陸大掾源護が朝廷に訴えたところ）一天の恤みの上に、百官の顧みありて、犯すところ輕きに准じて、罪過重からず。兵の名を畿内に振ひ、面目を京中に施す。

地元の有力者で国府の幹部でもある源護に訴えられた将門。宮廷実力者たちの支援を受け、罪に落ちるところか、大いに面目を施すこととなった、と。作者はその結果を否定せず、肯定的に伝える。また、合戦に臨む将門の勇猛な闘いぶりも描かれる。

○將門眼を張り齒を嚙みて、進みて以て撃ち合ふ。時に、件の敵等桶を棄て雲の如く逃げ散る。將門馬に羅りて風の如く追ひ攻む。これを通る者は、宛も猫に遇へる鼠の穴を失へるが如く、これを追ふ者は、譬へば雉を攻むる鷹の罠を離るるが如し。

天慶二年（九三九）の初め、武藏の国衙内部に紛争があり、將門は調停に乗り出す。この紛争は、都から赴任した權守興世王と介源經基が地元の有力者足立郡司武藏武芝（判官代として国衙に出仕）と、施政を巡って対立していた。作者の評価は武芝側に高い。

○聞くが如くんば、国司は無道を宗となし、郡司は正理を力となす。その由何とならば、縦へば郡司武芝、年来公務に恪謹して、譽ありて謗なし。苟くも武芝、治郡の名、頗る国内に聴え、撫育の方、普く民家に在り。

武芝は、武藏国での前例を無視して「正任の未だ到らざるの間に推して入部」しようとしたことを咎めた（『思想大系本補注・東洋文庫本注参看』。興世たち国司側は怒り、入部を強行した上、武芝の家財を没収する。作者は武芝側に過失の無いことを主張し、国司側を非難する。

○箸の如きの主は、眼を合せて骨を破り膏を出すの計をなし、蟻の如き従は、手を分けて財を盗み隠し運ぶの思ひを励ます。

この国司と郡司との抗争を調停するため、「自分の兵杖を率ゐ」て、將門は現地入りする。結果、權守興世王とは和解し、介經基は都に遁げ上り、將門らを謀叛の疑いあり、と誣告する。將門は関東諸国の無実を証する解（上申書）で対抗。却って功績を賞せられるかもしれない、という状況に到る。

右武藏国の紛争に関つた一件で、作者は一貫して將門・武芝側、即ち地方定住者側の言動を理解・支持する。作者は將門に共感するところがある、と後世評されるのも尤もである。この後、將門は、藤原玄明―常陸国住人。国司の指示に従わず、作者は「素より国の乱人たり、民の毒害たるなり」と非難―と共同行動を取り、常陸国衙を襲撃し、国司の権力を象徴する国印と官倉の鍵を没収、謀反人としての行動開始となる。新皇を称し、諸官吏を任命し、政權

の体裁を調えた将門を、作者はもはや支持しない。

○新皇 井底の浅き励みを案じて、堺外の広き謀を存せず。

将門の言動に共感を持ちつつも、現体制の根幹を否定する行為までは、到底支持出来ない。そういう作者を、「将門への共感を持ちながらも、体制側に属する人物」（日本思想大系8『古代政治社会思想』「将門記」解説。竹内理三一九七九刊）と見る考えも尤もである。ただ、前述のとおり、作者の推定には、なお考えるべき事情も多々あり、未だ論者に一致を見ない。本稿では作者論には触れない。

『将門記』の特色について、とくに強調したい点は、まずは前述のとおり、「合戦を主な材料とし、作品の中の主役を設定」していることである。次に「地方」の争乱を主な話題とし、しかも争乱を引き起こした「都」権力との摩擦を生ずることでもあるのだが―地方定住者たちへの共感―『将門記』の中では限定的なものであり、「芽生え」の段階といべきか―が認められることである。右二点は後出の軍記諸作品の中にも、多かれ少なかれ存在する事柄であり、その先駆をなす作品―軍記の骨格を示す作品として、『将門記』の存在は重い。

(イ)『陸奥話記』

『将門記』が成立して、およそ百年後、前九年の役（永承六年一〇五一―康平五年一〇六二）の経緯を記して成立した。作者も正確な成立年代も不明。次に掲げる大曾根章介氏の説明文が現在のところ、穏当なまとめといえよう。（日本思想大系8『古代政治社会思想』「陸奥話記」解説（一九八二）。諸説については、梶原正昭校注、古典文庫70『陸奥話記』解説（同前）

○作者は不明であるが、末尾に「今抄二国解之文」、拾「衆口之話」、注三「一卷」。以「少生但千里之外」、定多「紕繆」とあることから、在京のおそらくは官人であろうと察せられ、執筆時期も平定後あまり時をおかず書かれたものと推定される。

『陸奥話記』にも主役が存在する。ただし『将門記』の主役が将門一人であるのに、『陸奥話記』には二人の主役が登場する。

まず登場する主役は源頼義である。永承六年一〇五一頃、陸奥の安倍頼良を国守藤原登任が攻め、前九年の役の端緒となる。登任は失敗し、頼義が陸奥守となり、追討の任に当る。双方にとって幸運といふべきか、本格的な交戦以前に折よく大赦が行われた（紫式部も仕えた上東門院彰子の御惱―病状重篤による）。頼良は「帰服」し、頼義に懾り、同音を避けて頼時と改名した。任期を無事過して、頼義が帰京する筈の年、両者の間に紛争が勃発する。頼義は頼時の子貞任を呼び処罰しようと考えた。頼時は一族を集め、「頼義の要求は拒否する。彼我の境界にある衣川の関は閉鎖し、頼義の来襲に備える」と計る。一族も賛同し、「遂に道を閉ぢて通さず」。時に天喜四年一〇五六。

関の閉鎖につき、『陸奥話記』（以下『話記』と略記。群書類従本に拠り、読み下す）の中で、頼時は次のとおり述べる。まず、「人倫世に在るは、皆妻子の爲なり。貞任愚なりと雖も、父子の愛棄忘するに克^たへず」と、これからの行動は家族愛に基くものだ、という。その上で、「むざむざと貞任を殺されることは）関を閉ぢ、（頼義の要求を）聴^{ゆる}さざるに如^しかず。若し来りて我を攻めんか、吾が衆^{すなは}は拒み戦はんこと、未だ以て憂ひと為さず」と、抗戦を宣言する。注目すべきは、「頼義の要求は決して許さない」と敵愾心を燃やす一方、「自分はあくまで攻められる側である」と主張するところであろう。右主張が本人の言をそのまま伝えているならば、『話記』の筆者も、それを認めている（批判の言はない）こととなる。また、それが筆者の推考に拠るものならば、この時点での頼時に、積極的な謀叛の意志はなく、離反の範囲と認めた、ということであろう。俗にいう「売られた喧嘩を買う」形で、頼時たちは都の支配から自立する。筆者は、その行為を咎めない。

頼時の離反を招くこととなった頼義の人物像を、筆者は次のとおり伝える。

○性沈毅（「おちついて意志が強い」）にして武略（「戦いのはかりごと」）多し。最も将帥の器たり。

○威風大いに行はれ、拒捍の類、皆奴僕の如し。而して士を愛し施すことを好む。会坂（「逢坂」）以東の弓馬の士、大半門客たり。かくも優秀な武将として巻頭近くに紹介されている。しかし安倍氏との関係では、「性沈毅」と称えられる将軍にしては、軽々な行動であろう。筆者本心からの讃辞なのか疑わしい。

安倍一族の決断を知り、「將軍 弥^{いよいよ}嘖^いり、大いに軍兵を發す」。以後、頼義は「拒捍の類皆奴僕の如し」という『話記』筆者の紹介にもかかわらず苦戦することが多かった。それでも、『話記』の中では（安倍側の中心人物頼時の戦死ということもあり）、主役の立場にあり続ける。実際の成り行きからも、この時期、頼義以外に東北争乱の中心人物と目される人物はいない。

ところが、主役の交替は起きた。協力すべき隣国出羽の国司との連携も不調。朝廷の方針も「朝議紛紜」として定まらなかった。頼義はこの間、出羽山北^{せんぼく}（現在の秋田県横手市、湯沢市、大仙市、仙北市、仙北郡、雄勝郡に当る。中古には、雄勝・平鹿・山本三郡）の俘囚勢力を自軍に合流させるため、その中心人物である清原光頼・武則兄弟と種々交渉があった。その結果、武則が大軍を率い、陸奥国栗原郡で頼義と合流する。こうして新しく編成された頼義軍団は、大部分が清原氏に属する軍勢であり、頼義が自ら指揮できる兵力は総兵力のごく一部であつたらしい。

*頼義・清原連合軍の編成の詳細については、①前掲古典文庫『陸奥話記』補注七三②豊田武編『東北の歴史』上巻第四章2「前九年・後三年の役」（神居敬吉・昭和五四年第五刷・吉川弘文館刊）参看。なお、頼義の立場について両書筆者の見方は、それぞれ次のとおり。

- ①名目的には、もちろん鎮守府將軍である頼義が総司令官であつたには違いないが、実際に全軍の指揮をとつたのは武則で、（下略）
- ②形式上の総司令官は頼義であつたにしても、實際上の軍事行動は、武則の提案もしく同意によって決せられるばあひが多かつた。

両氏の見方は微妙に違うが、勢力の多寡や合流に到る経緯などを考慮に入れると、「武略多」き頼義の指揮権も制限されざるを得なかったことは確かである。

実情は概ね右のとおりとしても、『話記』の筆者は、それを露骨には指摘しない。軍団の編成を終り、全軍に檄を飛ばしたのは武則であった。

○武則遙かに皇城を拝し、天地に誓ひて言さく。「臣既に子弟を発し、將軍の命に応ず。志は節を立つることに在り、身を殺すことを顧みず。若し苟も死せざれば、必ずや空しくは生きず。八幡三所、臣が中丹（「まごころ」）を照らしたまへ。若し身命を惜みて死力を致さざれば、必ずや神籬に中り先ちて死せんと」。合軍（「全軍」）臂を攘ひ（「腕をまくりあげて」）一時に（「一斉に」）激しく怒る（「おおいに氣勢をあげる」）。今日鳩有りて軍の上を翔ぶ。將軍（「頼義」）以下悉く之を拝す。

源氏の守護神八幡神の使者である鳩は、本来頼義の祈誓に应えてこそ飛来すべきであろう。武則の祈誓に应じての出現は、武則が事実上主将であることの、筆者なりの表現であろう。この儀式を境に、『話記』の主役は、地方定住民に交替する。

初期軍記の内容を整理すると、次の三点を指摘出来る。すなわち、

- a. 地方（「都」）に対する存在としての「鄙」にあたる）とその定住民、さらにその自立への共感が伝わってくる。
- b. 作品中の主役の存在が明確である。
- c. 合戦描写も相当丁寧である。

以後の軍記は、これらの内容を全部または一部踏襲し、また新しい内容を付加して成立することとなる。

なお、『純友追討記』も、成立年代からすれば、初期軍記の一つに数えられても不思議はない。また、群書類従では合戦部に分類編入していることもあつてか、軍記とうけとられやすい。ただ、内容的には右の a. c. の二点が認め

難い。むしろ「伝」に近いのではないか。しばらく論及を措く。『奥州後三年記』（群書類従合戦部）は、絵詞由来の作品であり、原作に当る「合戦絵」の成立は後代のことである。よって初期軍記とは扱わない。

（三）鎌倉軍記―『保元物語』『平治物語』『平家物語』『承久記』―

前九年の役終了後、およそ百年経ち、保元の乱（保元元年（一五六））が起き、三年後には平治の乱となる。いずれも短期間で終息し、戦いの経過を書き留めた作品として、『保元物語』『平治物語』（以下『保元』『平治』と略記）が出現する。この二作品と『平家物語』（以下『平家』と略記）、さらに『承久記』を、発生したと考えられる時期によって、仮に「鎌倉軍記」と称する。学会として定着した名称ではない。なお、講演の際、鎌倉前期を念頭に「源平軍記」、後期を念頭に「北条軍記」と分割し、配布資料にもそのとおりに記した。少々踏み込み過ぎかと考え、訂正し、「鎌倉軍記」と仮に名づけ、時代の呼称と一致させる。

『保元』『平治』『平家』など、この期の作品については、異本の出現に注目すべきである。一人の人物の造型、一つの出来事の展開が固定されず、それぞれの筆者の理解に応じた記述となる。登場人物の気質・性格などが、諸本それぞれに描かれることになる。一例を示す。平治の乱中の清盛を描いた部分である。

○太式清盛、北の対の西の妻戸の間に、軍下知して居たりけるが、妻戸の扉に敵のいる矢が雨のふることくにあたりければ、太式清盛、大に忿て、「恥ある侍がなければこそ、これまで敵を近づくれ。のけや、清盛かけん」とて、甲の緒をしめて、妻戸の間よりつつと出、庭に立たる馬を縁のきはへ引よせて、ひたとのる。清盛、其日の装束には……下より上までおとなしやかに、真黒にこそ装束たれ。冑ばかりは、銀をもつて大鍬形をうちたりければ、白く耀て人にかはり、あはれ大將やと見えし。『平治』中・九

条家旧蔵学習院大学蔵本・新大系。校注目下力

*新大系脚注に次のとおり。

後出の他諸本は、これ以前、敵軍の関の声に驚き、兜を後ろ前にかぶって重盛に見くびられる清盛を描くが、底本にはそうした清盛像の矮小化は認められない。

○（義朝勢、六波羅に押し寄せ、ときをつくる）清盛時の声におどろきて、物具せられけるが、甲をとつて逆に着給へば、侍共、「御甲さかさまに候。」と申せば、臆してやみゆらんとおもはれければ、「主上是にわたらせ給へば、敵のかたへ向はゞ、君を後になしまいらせむがおそれなれば、さて甲をば逆にきるぞかし。」とぞ宣ひける。左衛門佐重盛、「なにと宣ども臆してこそみえられつれ。」とて、『平治』中・金刀比羅本・大系。校注永積安明・島田勇雄。この記事、古活字本も略同文。

一人の人物像が本文によって異なる例として、『平家』では、梶原景季の場合がわかりやすい。いわゆる語り物系の本文によると、概略は次のとおり。即ち、景季は出陣に際し、頼朝の愛馬いけずきの下賜を願ひ出て拒まれる。後日いけずきを佐々木高綱勢の中に発見する。意外な成り行きに腹を立てた景季は、「高綱と差違え、『よい侍二人死で、兵衛佐殿（『頼朝』に損とらせたてまつらん』と待ちうけた。ところが、「馬屋から盗み出した」と弁解されたことで、敵意を失う。

○梶原この詞に腹がゐて（『氣持が落着いて、「ね（ツ）たい（『してやられたわい）、さらば景季もぬすむべかりける物を』とて、ど（ツ）とわら（ツ）てのきにける。『平家』九・生ずきの沙汰・大系

小林秀雄が絶賛する場面である。

○「ねつたい」と大笑ひしてさつさへ行つて了ふ。まるで心理が写されてゐるといふより、隆々たる筋肉の動きが写されてゐる様な感じがする。事実、さうに違ひないのである。この辺りの文章からは、太陽の光と人間と馬の汗とが感じられる。そんなものは少しも書いてないが。（小林秀雄『平家物語』昭和17。全集七・新潮社・平成13）

しかしながら、同じく、『平家』を称しながら、次に示す延慶本の記事に描かれる景季像は、小林の感動を呼んだそれと、印象がかなり異なる。

○（高綱の弁解を真に受けて）梶原思ひけるは、「げに我もぬすむべかりける事をや。つやつや思ひよらずして佐々木にはやぬすまれにけり。あたら馬を終にそらしぬる事こそ念なけれ。あな口惜し、あな口惜し」とぞ思ひける。さて申しけるは、「略」佐々木殿の盗みはあえ物（『お手本』）にもしたし。男子生みたらむ産所には請じ入れまゐらせて引目をも射させまゐらせ、元服袴着の時は横座にすゑまゐらすべき程の盗み哉」とて、打ちつれてぞ咲ひける。（延慶本注釈の会編『延慶本平家物語全注釈』第五本（巻九）・汲古書院・平成二七。引用は同書の「釈文」に拠る。原文漢字片かな交り）

右の描写は、同じ段で「梶原と申すは大悪心の腹黒也」などと評され、「本段には梶原景季に対する悪意・憎悪が露骨に表現されている」（右注釈「注解」）ことの延長線上にある。表現の相違が意味することは何々か。また景季への低評価は、『平家』に限らず、『曾我物語』にも見え、父景時が多数の御家人連名で讒訴（直接には結城朝光への）を糾弾され、失脚した事件との関りも考えられる。本稿では立ち入らない。

『承久記』においても、登場人物の描写が本文によって異なることは、既に知られている。

○（古態本と考えている慈光寺本では）人物の描写、性格づけも他本とは甚しく違っていると言つてよいであろう。特に際立っているのは、義時の造型の仕方である。（久保田淳「承久記 解説・新大系『保元物語 平治物語 承久記』・一九九二・岩波書店）

○（実朝死す）爰ニ、右京権大夫義時ノ朝臣思ふ様、「朝の護り源氏ハ失せ終リヌ。誰カハ日本国ヲバ知行スベキ。義時一人シテ万方ヲナビカシ、一天下ヲ取ラン事、誰カハ諍フベキ」。（慈光寺本・新大系・送り仮名を平仮名で補った）

○其比、鎌倉ニ右京権大夫兼陸奥守平義時ト云フ人アリ。《略》ケン威重クシテ国中ニアフガレ、政道タビシウシテ王位ヲカルシメ奉ラズ。雖レ然、ハカラザルニ勅命ニ背キ朝敵トナル。（慶長古活字本・新大系）

同じ事件・人物を描きながら、その描き方が筆者によつて異なる、という現象は、後世の我々にとって、戦乱に関つた人々の姿や心情を、少しでも豊かに吸収する手がかりがある、ということであろうか。鎌倉時代に起源を持つ諸作品に始る事件と人物像の流動性は、波の強弱を伴いながら、戦国軍記に及ぶ。

初期軍記の筆者たちが示した「地方定住者への共感」を、鎌倉軍記ではどう扱っているのか。

『保元』で注目すべき記事として、次に一文を示す。戦い敗れ、比叡山へ逃亡した為義に、為朝の説得。

○「坂東へ下ラセ給ヘカシ。今度ノ軍ニ上リ合ヌ義明、畠山庄司重能、小山田別当有重等ヲ、太政大臣、左右大臣、内大臣ニモ成シ、是等ガ子共ヲ、大納言、宰相、三位、四位、五位ノ殿上人ニ成シヲキ、将門ガシタリケル様ニ、我身ヲ親王ト号シテ、奥ノ基衡カタライテ、ネズノ関ヲ堅メサセテ、奥大將軍ニハ、四郎左衛門ヲ下申、海道ヲバ掃部權助ニ堅メサセ申、山道ヲバ七郎殿ニ固メサセ申テ、坂東ノ御後見為朝シテ、世中ナドカスギザルベキ」トゾ申タル。（半井本『保元』下・新大系）

為朝は、将門が樹立したという地域政權に倣い、関東の地に独自の政權を打ち立て、要所を閉鎖して自立するべき、と勧める。為義は義朝が必ず助命に尽力すると信じ、為朝の提案を拒む。関東独立政府の旗揚げは幻想に終つた。しかしながら、将門は挫折したけれども、奥六郡の支配者である基衡の支援を受ける、など、少し綿密に計画すれば、実現の可能性も皆無ではなかった。筆者の考えもそこにあつたのかもしれない。為朝の進言の内容を筆者自身の言葉で否定あるいは冷評しているわけではない。為義の拒否の理由も、朝敵となり、入道もした自分に「其ホドノ可_レ有_二果報_一共不_レ覚」。その上「我身ノ合期シタラバコソ、子供引具テ、東国ヘモ趣キ、山野ニモ籠ラメ」。即ち、老いて身体が利かなくなつた自分には無理だ、という。計画自体が妄想だ、とは言つてない（あるいは、作者が言わせてない）。為義の口から、為朝について、次のとおり紹介する場面がある（上・新院、為義ヲ召サル事）。

○三年二九国ヲシタガヘテ、上ヨリモナサレヌニ、我ト鎮西ノ惣追捕使ニ成テ、今年六年ニ候ツル也。

地方を中央とは独立して支配することが可能だ、と為義は明言しているといえよう。地方が自立することの可能性を筆者は記し、その可能性を筆者自らが否定する表現はない。金刀比羅本は、為朝の九州支配について記事がない。為義の東国下向を勧める為朝の提案は、ほぼ同文である。ただし「我身ノ合期シタラバ」云々の言はない。「衰老の今、出家入道して後、それほどの果報有べしとも覺えず」とあり、氣力の無さを語る場面となっている。古活字本では、「我身が合期したらばこそ、各引具して山林にも立かくれめ」と、「東国」は欠落してしまう。為朝の提案の骨子は残存するも、余程簡略になっている。東国への関心の厚薄を生む理由は何なのか。今は課題とするに留める。

『平治』における東国への依拠感、『保元』に比べて低い。しかし、義朝が一度は東国で活力を養い、再起する――都へ攻め上る――ことを志した、と伝えている。

○鎌倉の御曹子（＝義平）をよび参らせて、「わ君は、甲斐・信濃へ下て、山道より責上れ。義朝は東国へ下て、海道よりせめのぼらんずるぞ」と仰られしかば、悪源太殿は飛弾（マ）の国のかたへとて、只御一所、山の根に付ておちさせ給ひ候ぬ。（九条家旧蔵学
習院大学蔵本『平治』中・新大系）

○悪源太と大夫進とめして、「一所にてはあしかるべし。義平は北国へくだり、越前国よりはじめて北国の勢そろへてのぼるべし。朝長は信濃へくだり、甲斐・信濃の源氏どもをもよほしてのぼるべし。義朝は東国にくくだり、兵相具してのぼらんずるぞ。三手が一所になるならば、平家をほろぼし、源氏のものになさんこと何のうたがひかあるべき」と宣へば、二人の公達、やがて奥波賀をいでられけり。（金刀比羅本『平治』中・大系）

○義朝こゝにての給ひけるは、義平は山道をせめてのぼれ。朝長は信州へ下り、甲斐・信濃の源氏どもをもよほして上洛せよ。われは海道をせめのぼるべし」（古活字本『平治』中・大系）

義朝にとつて、地方（この場合は東国だけでなく北陸・甲信も想定）は逃避するための場所ではない。再起の力を養える

場所である。地方の持つ力への期待が義朝のことばには籠められる。実際には「兵相具して」「海道よりせめのぼる」事も、「源氏のようにな」す事も叶わなかった。しかし、結果を承知している筈の諸本の筆者は、この時の義朝の目論見を冷評・揶揄したりすることはない。義朝は地方武士の掌握に成功せず、その力を活用出来なかったが、後代、承久の変にあつては、地方定住民出身の北条氏が、地方武士の結集に成功し、都の権力との対決を勝利した。

○権大夫（＝義時）ハ天下ヲ打鎮メテ榮ミ榮フ。（慈光寺本『承久記』下・新大系）

右本ならびに古活字本の筆者は、大尾にそれぞれ次のとおり、乱の総括をする。

○目出タサモ哀サモ、ツクル事ナキ此世ノアリサマ、大概如レ此。（慈光寺本『承久記』^{あはれ}

○四海ニ宣旨ヲ被レ下、諸国ヘ勅使ヲ遣ハセ共、随奉ル者モナシ。カ、リシカバ、時房・泰時・義村・信光・長清以下、数万ノ軍兵、三ノ道ヨリ責上リケレバ、靡カヌ草木モ無リケリ。（古活字本『承久記』下・新大系）

古活字本には、かつて義朝が夢見たであろう東の三方面から、東国武士が一斉に攻め上る、という光景が描き出される。慈光寺本の筆者は公武・都鄙に中立の立場であろうが、北条側の勝利に不満ということでもない。

『保元』為朝は、要衝を閉鎖しての自立を提案した（実現しなかったが）。『平治』からは様子が変わり、地方は敗者の勢力回復の拠点と考えられるようになる。敗者が天険を利用して閉籠るためではなく、地方の軍勢力を結集し、進軍・上洛して天下を手中に収めるための拠点である。なお、『平治』には、①頼朝が平家を打倒し、全国を手中にするまでを記す本文（学習院本「日本国、残所なくぞしたがへ給ひ」、古活字本「天下をおさめて」と、②頼朝が伊豆に流されたところを攔筆する本文とがある。③の筆者はこの物語を完結型の作品とし（義朝は志を果せなかったが、頼朝が遺志を継ぎ、成功させる）、④の筆者は未完の物語（ただし、吉夢の話を記す）とし、将来への期待を示して終る。物語の発達段階からいえば、⑤型が古態かもしれない（頼朝の成功譚は本来『平家』の分担か）。

『平家』には無数の地方出身武士が登場し活躍する。戦いの場も殆ど洛中とその周辺に限定される保元・平治両乱に比べ、地方各地に拡大する。地方の武士も動乱に順次巻きこまれ、結局は多くの地方武士を傘下に収め得た源氏側の勝利となる。諸本の間で人物描写に差異があるものの、地方出身の武士たちが、他律的ではなく、自らの思惑でそれぞれの戦い方を決める姿も共感を伴って書きとめられる（たとえば巻八の妹尾兼康・緒方維義）。諸本の筆者は、それぞれ思い入れの濃淡はあるものの、地方の動向を注視していたことがわかる。

なお、書名からは鎌倉時代、とくに北条氏の幕政掌握期の軍事を記したようにも見える書物が二篇ある。ともに『北条九代記』を称する。一つは『鎌倉年代記』とも称する年表（鎌倉末期成立か）であり、一つは延宝三年^{一六七五}刊の近世軍書である。いずれも鎌倉軍記に属するものではない。

(四)室町軍記

(ア)『太平記』

室町軍記という呼称は、通常、明德二年^{一三九一}に起きた明德の乱から、文明九年^{一四七七}に一応の終結を見たときとされる応仁文明の乱の間に成立した軍記を指す。本稿では、概ね成立時期によつて作品を区分しているので、普通特立して扱われる『太平記』も室町軍記の中に入れることとした。

『太平記』は作者不明。内容は、はじめに頼朝以来高時に至る鎌倉府の略史を記し、貞治六年^{一三六七}三代將軍義満を補佐するため、細川頼之が入洛するまでの諸事を記す。巻三十二のみ残存の永和三年^{一三七七}二月以前に書写された永和本があり、成立年代を推定出来る。

*『太平記』諸本の大概については、岩波文庫『太平記 四』解説『太平記』の本文」に要領よく纏められている（兵藤裕己・

前文で、「(一)初期軍記」の内容を三点に整理した。次に再掲する。すなわち、

a. 地方〔都〕に対する存在としての「鄙」にあたる〕とその定住民、さらにその自立への共感が伝わってくる。

b. 作品中の主役の存在が明確である。

c. 合戦描写も相当丁寧である。

『太平記』にあつても、右の内容は概ね維持され、「軍記」としての根幹は保たれている。ただ、社会情勢の変化もあり、もちろん従来とは事情の異なる点もある。逐条確認する。まず a. について。『太平記』に登場する主な地方定住民にはいくつかの類型がある。一つは①鎌倉期に、地頭職を給され、現地に下向した武士やその一族。たとえば巻二十八「三角入道謀叛事」に名が見える武士たちは、攻守ともに殆どがそれである。この条では、大部分が中国地方に居住し、関東など、あまり遠方の武士は見当らない。この地方中小領主層の活躍抜きで、『太平記』の合戦記事は成り立たないであろう。本稿では考察を省く。

次に②「溢れ者（あふれもの）」といわれる人々が活躍する。呼称からは何となく住所不定の放浪者のようでもあるが、『太平記』の中の溢れ者は、「真木・葛葉ノ溢れ者」（巻八・大系）などと、居所の明らかなことが多く、その居所近辺での活動が普通である。また、「死生知ラズノアブレ者共、此ヲ先途ト命ヲ捨テ戦フ」（巻二九）と、勇猛でもある。この溢れ者や野伏（溢れ者と一体のこと）といった、体制の武士とは違う武装民の活躍ぶりが、合戦描写に活気を添える。楠正成の出自は未だに不明というところであるが、こちらに分類すべき人物であろう。

* 溢れ者は、戦国軍記などにも、少し違った雰囲気が登場する。

b. について。長篇であり、全篇を通じた主役の設定は無理であろう。後醍醐天皇の死（巻二一・延元四年（一三三九）ま

では、天皇以上に大きな存在はないだろうし、その後、尊氏の死（卷三三・文和三年（一三五八））までは尊氏以上の存在はなく、それぞれの時期の主役と認められる。卷三四からは、統一的な主役の設定はない。また正成・義貞など、部分的に主役を勤める人物もある。

c. については、条件を満たしているといえよう。総じて、『太平記』が、軍記の伝統的資質を受け継いでいることは確かである。この他『太平記』の筆者は人物とその行動・事件の成り行きにつき、賞讃・非難を頻繁に行う。この批評精神は後世の軍記・軍書にかなり影響を与えたことを忘れてはならない。

*この時期（室町初期）『梅松論』も成立する。『歴史物語』に分類されることもある（『日本古典文学大辞典』五・一九八四刊）。群書類従では合戦部に入る。人物評価の点などで、『太平記』と異なることもあり、参考にすべき作品である。

(イ) 『明德記』から『応仁記』まで

明德の乱（明德二年（一二九一）〈南朝元中八年〉）の顛末を記して『明德記』が成立して以後、年号を書名に採用した軍記が順次出現した。『応永記』（応永の乱。大内義弘が和泉国堺に拠って叛いた一件。応永六年（一二九九）のこと。別称『堺記』など）・『嘉吉記』（赤松満祐が將軍義教を殺害した事件（嘉吉の乱）。嘉吉元年（一四四一）・『長祿寛正記』（畠山家の内紛。享徳四年（一四五五）から寛正六年（一四六五）まで）・『文正記』（斯波家の内紛など。文正元年（一四六六）・『応仁記』（応仁文明の乱。応仁元年（一四六七）から文明九年（一四七七）まで。『応仁記』では山名持豊・細川勝元の没した文明五年まで。他に別本の『応仁略記』『応仁別記』あり）の諸書を群書類従合戦部に収録。いずれもそれぞれの争乱後、時日を経ないときの成立であろう『嘉吉記』は多少後かもしれない）。

右の六作品の記す争乱の主な舞台は、明德・嘉吉・文正・応仁の各乱が都とその周辺、応永・長祿寛正が地方となる。ただし、明德・嘉吉・応仁各記は、地方における出来事も描き、たとえ都が主戦場であっても、地方と無関係に

争乱は展開しないことを忘れない。

各記の作者はすべて不明である。ただ、『明德記』の作者について、注目すべき論があるので、次に示す。

○これまでの作者説は義満近侍の者という要素との組合せで成立している。(略)『明德記』に登場する)室町幕府の有力な守護大名畠山氏(＝能登)の被官温井(＝七尾市温井町)入道楽阿が適合するか否か、その可能性を探ってきた。その結果、楽阿と確定することはできないまでも、彼のような被官を作者に当てることは、妥当なことと思われるに至った。おそらく室町軍記・戦国軍記と称される作品の作者のうち、その相当数は被官層の武士であろうと想像される。(和田英道『明德記 校本と基礎的研究』研究篇第三章『明德記』の作者 笠間書院・平成二刊)

〔参考〕○作者は明らかではないが、その本文より考へて足利義満近侍の者の一人であろうと推定せられる。(岩波文庫『明德記』解題・富倉徳次郎 一九四二刊)

和田氏の想定が正しければ、軍記の世界は地方被官層という、今まで注目されなかった書き手を「層」として得たこととなる。ただ、『明德記』については、和田氏の論に理があるとしても、他の室町軍記の作者像は解明に至らない。被官層を含め、争乱を体験した地方武士たちが、軍記著作の担い手集団として定着するのは、次代、すなわち戦国軍記の時代からであろう。

(ウ)『結城戦場物語』『大塔物語』

『結城戦場物語』の概要は次のとおり。将軍義教と関東公方持氏との対立から起きた、いわゆる永享の乱(永享一〇・一四・三八・一二)の後、永享十二年に持氏の遺児春王丸らが結城氏朝の支援を受け、常陸結城城で挙兵する。戦利あらず、同十三年(二月に嘉吉と改元)春王丸兄弟は美濃垂井で斬られ、事件が終る。以上の経緯を記す。作者には藤沢清淨

光寺十七代暉幽上人が当てられる（古典文庫421『結城戦場物語』林祝子『結城戦場物語』の作者について。昭和五六刊）。『大塔物語』は、応永七年一四〇〇に信濃で起きた守護と国人との抗争を描く。「作者は善光寺にかかわる僧侶あたりか」（『日本文学大辞典』一、加美宏、一九八三刊）。両作品とも地方に起きた事件の始終を描いているが、戦いに参加した地方の武士たちの著作関与は確認出来ない。右二作品は僧徒との関りが推定されている。僧徒と軍記は以前より関係が深く、通時的に整理する必要がある。なお、室町軍記の検討には古典遺産の会編『室町軍記総覧』（明治書院、昭和60刊）が参考になる。

(五)戦国軍記（戦中）

(ア)中世（文明十二四七八〜永禄十一五六七）

文明九年に応仁文明の乱が一応終結したあとも、争乱は各地方に拡大する。戦国時代の始まりとする。また、永禄十一年九月、信長が入京した時を近世の始まりとする。また、元和偃武以後寛文までを戦後の時期、それ以後を脱戦後の時期とする。元和元年を昭和二十年とすると、延宝元年は平成十五年二〇〇三に当る。どの辺りを戦争体験風化の始まる時期と認定するのか、難題ではある。今迄の調査の結論として、寛文と延文の間に線を引く。もちろん、ある年に達すると、社会の雰囲気や書物の内容が一斉に変わる、ということはない。大方のめやすということである。なお、戦国軍記や近世軍書の検討には、『戦国軍記事典 群雄割拠篇』一九九七・『戦国軍記事典 天下統一篇』二〇一一が参考になる。いずれも古典遺産の会編・和泉書院刊。

近 世 軍 書		後 期 軍 記 →	
(脱 戦 後)	(戦 後)	戦 国 軍 記 (戦中)	
延宝元 以後 1673	寛文十二 1672 ← 元和二 1616	元和元 1615 ← 永禄十一 1568	文明十 1478 ← 永禄十 1567
近 世			中 世

(区分の概略)

この時期に成立したことが確実な作品は、それ程多くはない。『大内義隆記』は、天文二十年（一五五一）九月一日、家臣陶隆房（のち晴賢）の叛乱によって自尽するまでの一代記である。記事は当時の人心を描いて興味深い場面も多々あり、内容的にも概ね信頼をおけるといえよう。ただし、奥書に「天文廿年冬霜月中旬 周防国於山口龍福寺書之」（群書類従本）とあり、成立時期の特定に役立ちそうだが、本文末尾近くに翌二十一年三月に後継者として山口入りした大友晴英（のち大内義長）のことも書いてあるので、辻褄が合わない。この点につき、米原正義氏は『中国史料集』（第二期戦国史料叢書7、昭和四一、人物往来社刊）の『大内義隆記』解題に「本書巻末の部分は、のちに付加されたものと考えるべきであろう。やはり奥書はそのまま生かすことができると思うのである」と記されている。一方、本文の最末尾に「此双紙ハ密々ニ物語也」とあり、これは追加記事でない可能性もあり、決め難い。もともと原本といえる写本も発見されていないので、「廿一年」とあつたかもしれない。なお、福尾猛市郎『大内義隆』（旧版人物叢書・昭和三四、吉川弘文館刊）に「筆者が竜福寺住職であるとすれば、八世日繼須益（永禄三年三月二十六日没）となる」。

この頃、あるいは後代に、書名に主な登場人物の名を利用することが少くない。作者が「人」に大きく関心を持つたことの反映であろう。群書類従だけでも、次のとおり。（順不同）

○『省略』蒲生氏郷記・別所長治記・上杉憲実記・細川大心院記・瓦林正頼記・細川忠興軍功記・中村一氏記・武田勝頼滅亡記・水谷蟠竜記・最上義光物語・元親記・黒田長政記・清正記

古くは『将門記』『義経記』の例もある（もともと原題は不明）。全体の作品数が増加したので、人名由来の書名も増加する、という関係もあるが、時代を動かす「人」の存在により大きな関心が集まったのが、その大きな理由であろう。やがて『信長記』や『太閤記』の出現となる。

(イ)近世（永禄十一一五六八）元和元年一六二五）

永禄十一年九月、義昭を奉じて信長が入洛してから、元和元年（慶長二十年）、大坂夏の陣が終り（五月）、いわゆる元和和偃武を迎えるまで。覇者の座をめぐり、信長・秀吉・家康らを中心とする武装集団が全国各地で激突する時期である。ただ、この三者に関しての軍記は、次の時期、戦後になつての成立が少くない。著名な作品としては『信長公記』（太田牛一作。『信長記』と題する諸本が多いが、後出ながら世間に流布した小瀬甫庵『信長記』との混同を避け、陽明文庫蔵本（角川文庫に翻刻。昭和四四刊）に拠つて『信長公記』と呼ぶ）が、この期の成立である。

『細川両家記』は、永正元年一五〇四から天文十九年一五五〇までの記事を収めた前半と、天文二十年から元亀元年一五七〇までの記事を収めた後半とに分かれる。前半部の末尾に作者生嶋宗竹の職語（天文十九年）、後半部末尾に「春椈書之、長老生九十二歳」と記す元亀四年の職語がある。前後二部の作者については、別人説もあるが、採らない（小論「戦国軍記の表現——『細川両家記』から『足利季世記』へ」、日本文芸研究52巻4号、関西学院大学日本文学会、二〇〇一・三）。生嶋家は摂津国川辺郡生嶋庄（現在の尼崎市に属する。川辺郡は頼元以後、細川氏が分郡守護だったらしい）の住民であつたらしいが、細川氏との関係や宗竹の経歴は詳細不明（小論「細川高国死す」あしかぜ、笹川祥生先生喜寿祝賀有志会編、平成三〇刊）。細川一族・守護代級の人々には表現上敬意を表わす。

『足利季世記』八巻は、この時期の最末期ころ（遅くとも家康の將軍就任の慶長八年以後）に成立（前掲小論）。『細川両家記』に基く記事が多い。ただし、巻一・二と巻三の4分の一ほどは『公方両将記』が利用されている。『細川両家記』成立の時期と『足利季世記』成立の時期とは、おそらく数十年程度の差であろう。その間に筆者が変れば事件や人物の描き方も変る。次に『公方両将記』・『重編応仁記』・『応仁後記』と合せて、その変り方の一例を示す。永正五年一五〇八五月、細川高国勢が摂津国池田城を攻めた時の記事である。

*『公方両將記』作者・成立時期とも不明。下巻に「其（一義維）御子ヲバ阿波ノ御所義榮ト申ケル」とある。義榮の任將軍（永禄十一年二月）を記さず、その事を知らなかったとすれば、誕生（天文七年）から永禄十年の間か。『細川両家記』と、ほぼ同時期の成立、あるいはやや早い時期か。後考を俟つ。続々群書類従^四所収。

○（有力な一族の退去）残ル軍兵ドモ今ハ叶フベカラズトテ、同苗廿余人^{十カ}雑兵七千人切テ出、寄手ノ大勢ヲ散々ニ追払ヒ城ヘ引返シテ、五月十日筑後守ヲ始トシテ、一族同苗七十余人一度ニ腹ヲ切テ、城ニハ火ヲ掛焼捨ケリ、是程敵味方移リカハル世ノ中ニ、池田少シモ心ヲ變介（一改）セズ節ヲ守テ討死シケルヲ、都鄙皆褒ヌ人無リキ、『公方両將記』下）

○（有力な一族の退去）寄手は是にきをひて。五月十日に堀をうめさせ。きびしく責ければ。城の中よりおもひ／＼に切て出。同名諸衆廿余人腹を切。雑兵七十余人討死也。国中に同心するものなきに。かやうにふるまひける事よ。大剛の者哉とかんぜぬ人こそなかりけれ。『細川両家記』

○（有力な一族の降参）籠城ノ人々力ヲ落シ同五月十日筑後守腹切テ城ニ火ヲカケ煙モロトモニ名ヲ雲上ニ上ニケル同名侍廿余人雑兵七十余人討死ナリ国中ミナ敵トナルニ只一人コラエテ討死ハ大剛ノ兵ト感セヌ人ハナカリケリ『足利季世記』二二

○（有力な一族の降参）相残軍兵共今ハ叶フベカラズトテ同氏廿余人雑兵七十余人切テ出寄手ノ多勢ヲ追払ヒ城中ヘ引返シ時ニ五月十日筑後守ヲ始トシテ一族七十余人一同ニ腹切テ城ニハ火ヲ懸ケ焼捨ケリ是程移リ替ル世ノ中ニ池田一人心ヲ變ゼズ討死シケルハ名譽也トテ皆人美談セシメケリ『重編応仁記・応仁後記下』史籍集覽・明治一四翻刻版

右の合戦につき、『後法成寺関白記一』（大日本古記録・二〇〇一刊）に記事がある。

○去十日池田没落云々、（永正五・五十二）

○先日池田城討取頸百十余人云々、実檢七十余云々、言語道断之次第也、（同年五・十九）

高国勢の猛攻に耐えかねて、一族すら脱落する状況の中で、変心変節することなく、自らの思いを貫いた池田城主

は、右四書の中で賞賛される。強大な軍事的圧力に屈せず、意地を通した地方定住の武士への、筆者の共感も感じる。ところが、四人の筆者がこの城主（池田貞正）への共感を寄せたことは間違いない所であろうが、直接にその気持を表現しているわけではない。「都鄙皆褒ヌ人無リキ」「感セヌ人ハナカリケリ」「皆人美談セシメケリ」。「人」の正体は何か。賛辞にしても筆者と対象との間に一線がある。この点、『重編応仁記』を除き、同時期（慶長年間）に成立した『信長公記』の筆者は、自身の判断としての評価を記す。

○（武田勝頼の最期）武田四郎勝頼若衆土屋右衛門尉、弓を取合ひ、さしつめ引きつめ、散々に矢数射尽し、能武者余多射倒し、追腹仕り、高名比類なき働きなり。（角川文庫『信長公記』^{十五}）

この対象との距離感の違いは、戦争体験の濃淡によるものであろう。文章のスタイルは時代だけでも決まらない。次期（近世軍書の時期）に入ると、当初、戦後の時期には、体験者の執筆参加は増える。

（六）近世軍書（戦後から脱戦後の時期へ）

（ア）戦後（元和二年一六二六～寛文十二年一六七二）の時代

勝者と敗者の明暗が、はっきりと分れた時期である。軍記の執筆に戦いの体験者が多数参加するが、概ね敗者の立場にある。『常陽四戦記』大尾にある慨嘆は、この時期成立の「軍記」作者の大方の思いであろう。

○蓋は天正十年後の軍は皆むた（^{けだし}無駄）となる骨折と成りぬ。（続群書類従21下）

ところで、戦国軍記と称される作品の多くは、戦国時代ではなく、元和偃武後の成立である。本稿では、元和偃武後に成立した「軍記」を、「近世軍書」あるいは「軍書」という名称を用いる。

元和偃武の後、寛文に到るほぼ五六十年の間に成立した軍書には、戦後社会への不満―政治批判の形をとることも

あれば、個人的不平の訴えであることも――が籠められる場合が少くない。

成立の時期としては元和偃武以前になる。小瀬甫庵は、その著『信長記』の刊行を決意したのが、慶長甲辰（＝九年）の春に「あやしき夢の告げ」を得てのことという（刊行は元和八年）。前年慶長八年二月、家康は將軍宣下を受け、武家の棟梁の名目を獲得する。甫庵は『信長記』の序に当る「起」の中で「家国の長」の施政を批判する。現代政治批判、というところであろうか。

○所詮今、家国（＝国家）に長たる人、武の身を立つべく、他を制しつつ、国を威すべき事を知つて、文の身を保つべく、他を懐かしむべく、家国安かるべきの理を知らず。僅に創業の功ありと云とも、守文久しからず、尊卑相苦しみ万民塗炭に墮つ。（神郡周校注『信長記・上』古典文庫58・現代思潮社・一九八一刊。下巻も同年刊。底本は寛永元年板本）

相当激しい政治批判であるが、この批判が家康の眼中に入ることにはなかった――刊行は元和八年、家康の死は同二年――。刊行時にどれだけ世間、とくに幕府側に影響を与えたか不明であるが、少し間を置いて、延宝以後政道を論ずる作品が出現する先駆けとなったことは確かである。

『信長記』に続いて『太閤記』の刊行となる。初刊の年は確かでないが、寛永十一～十四年の間ということであろう（新大系『太閤記』解説。檜谷昭彦『太閤記』における「歴史」と「文芸」。一九九六年刊）。この作品の中でも甫庵は政道論を展開する。とくに巻二十・二十一の「八物語」は、檜谷氏の解説によれば、「儒教的政治および戦略論」。それはそれでありとして、随所に強調されるのは、政治を実行する吏僚を採用する際に注意すべき事柄である。

○何れの道も其すべ能知つるかたに尋とひ、宜に随て行ひなば、違ふ事もなく安らかなるべし。殊に政道上は取分其道知れる方に付て任せたらましかば、いとめでたかるべし。（巻二十、○君臣両用）

○一 秀才の人に大臣之職を附与する試之論 国主は、常に大臣の職に居べき才を見立ん事を務として怠るべからず。（巻二十、○

君道)

右は一例である。さらに全巻の冒頭部分に置かれた「或問」の中で、大村由己の言として、次の文がある。

○哲人の地位なる人は、大略、世の業もつたなく、もの云事もしたどにして、諸人の用もなきものなり。故に牢人に成り易く、有つきは難き事多し。〈略〉或遊客となり、都に在て世渡るわざをならひ、或田舎に在し朋友の領内にて、山海の便りに其日をくらし有とみえたり。かやうの人の中にこそ、勝れて能人も有べけれ。

甫庵の経歴も考え合せ、右にいう「其道知れる方」「秀才の人」「哲人の地位なる人」は、甫庵自身を指すのではないのか(小論『戦国軍記の研究』第二章六「甫庵の嘆き―『信長記』執筆の意図―参看。『信長記』執筆の意欲をかき立てたものは、儒教的政道論を宣布するという目的もさることながら、有能な自分を重用しない当時の社会―直接には徳川政権―への痛烈な不満ではないか。また、各々の境遇により、新しく迎えた偃武の時代に不満を抱く人は、甫庵だけではなかった。

○今度大坂にて、恐ろしくもなき所にて逃げたる者が、過分に重ね地行を取て、人を多く召連れて、平押にありく。我等共ハ又、武辺したる事もなし。猶々逃げたる事もなし。先祖の御忠節も際もなし。又我等辛労も際もなし。御主様にハ、当將軍様迄御九代之御普代なれ共、か様に被成ておかせられ候らへバ、右之衆が人多にて通れば、脇へ乗寄せて通る時ハ、さりとハ御情なき御事かなと思へバ、人知れず、大とちのせいなる涙がはらくとこぼれけれ共、何の因果かなと思ひて、心と心を取なおしてこそ、ありき候らへ。(日本思想大系『三河物語 葉隠』『三河物語』斎木一馬・岡山泰四校注 一九七四刊)

右は、作者が徳川家の旗本、二千石の大身で、勝利者の側に立っている筈なのに、という例。次に示すのは滅亡した小田原北条氏の遺臣の例。

○人々もあらぬかたはらに、いにしへの傍輩四、五人かくれこぞり居て、うさつらさのみかたる。運のきはめとはいひながら、生

ては恥辱をいだし、死てはそしりを残す事無念限なし。《略》此人々（『後北条氏一門』）の子孫末葉までも命ながらへましませば、流人と成ていくにおはすとも、日本国はよもはなれじ。一門が其中に、なじかは一人世に出て天下をしたがへ、会稽の恥辱を清めざらん。《略》ひとへに、我も人も、命を全く持て、以前の恥をすゝべし《略》と云。岸根三左衛門と云老士聞て、声高し、壁に耳あり、つゝしむべしといひつる事も今は徒に、世に捨てられし氏直公も、世にさかへ給ひし秀吉公も、末の露もとの雫とみなきえはてたまひぬ。いづれの秋にあはではつべき。《戦国史料叢書『北条史料集』『北条五代記』底本寛永十八年板。萩原龍夫校注、昭和四一、人物往来社刊》

敗残の浪人生活を「恥辱をいだ」きながら送る人々にとり、後北条氏一門の決起こそ「うさつらさのみ語」り合う日々から抜け出す機会であった。聞き様によつては、危険な企みと受けとられかねない会話も交した。今となつては空しい思い出となった。それでも作者（たち）は、いづれ徳川の世にも終りは来る（北条の復権もひよつとして）と淡い期待を持ち続けていると見受けられる。ただし、この程度の期待さえ憚られるということか、右の一文は後板（万治二年一六五九）では削除された。

かつて小論「戦国軍記序説（その一）——令名の記録——」（京都府立大学学術報告・人文 第二十号 昭和四三。『戦国軍記の研究』に再録）の中で次のとおり論じた。

○一般に、戦国軍記は、敗者の記録であることが多い（とくに元和から寛文にかけて著された諸作品の基本的性格といえる）。また、次のとおりに総括したこともある。

○戦いが終り、そのもたらした結果が明らかになつていくにつれ、自分の行動に何の意味があつたのか、などと、改めて問い直す気持が生まれてきたためであろう。自分たちの努力が明瞭な形では報われなかったことへの恨み・嘆きが籠められていることも多い。また登場人物への批判もかなり明確になる。この作品群は戦後文学といえる。（前掲『戦国軍記の研究』第三章一）

この時期の「軍記」は「敗者の記録」であり、「敗者の恨み・嘆き」が籠められた戦後文学であると、改めて総括する。

何故、この時期の作品が「敗者の記録」であるのか。それは執筆者として、実戦の参加者とその関係者が多数参入してきたからである。実はこの点が前代まで（元和以前）と大きく異なる。

なお、戦中・戦後の区分は年表上、どこかに設定せざるを得ない。しかし個別には時期のずれを生じる場合もある。

○（播磨三木城主別所氏の譜代の家臣来野弥二右衛門は戦傷のため歩行不自由となる）其後軍場へ不_レ出。三木落城之後、作州側山家二知人有テ引籠リ存命也。戦ノ次第討死武勇ノ跡モ。後世ニハ名ヲダニ知人アルマジキヲ歎カシクテ。如_レ此綴留ル者也。心アラン人ハ此日記ヲシルベニ文章ニモ載置給へ。『別所長治記』 群書類従21

三木落城は天正八年（一五八〇）正月で、年表上は戦後とはいえない。しかし、来野弥二右衛門にとつての戦後はこの時始つた。こうした個人経験の差も作品研究にあたり、考慮する必要がある。

（イ）脱戦後（延宝元年（一六七三）以後）の時代——軍記史の終章——

延宝以後にも、過去の戦乱の様相について記述した作品が成立する。これらの作品には、例えば戦国時代の合戦を描くようでありながら、実は政道評論を主眼とする作品もある。また、歴史評論を執筆の主目的する、いわゆる通俗史書も多数出現する。『前々太平記』『前太平記』のように、『太平記』を書名に組みこむことも多く、近世の書籍目録以来軍書に分類されるのが普通であつた。明治以後は『通俗日本全史』に入れられたことも一因となつてか、通俗史書あるいは戦記に扱われもする。ただ、『西国太平記』（延宝六年刊）『東国太平記』（宝永三年（一七〇六）刊）など軍記類として扱われる作品もある。これらの作品も、政道論を述べるものが少くなく、元和以前とは様相が異なる。延宝元年で

元和元年から五十八年経ち、戦乱の体験者が戦乱を回想しての執筆もそろそろ困難になる。回想記型の軍記の執筆も近世中期以後皆無ではない。それよりも既成の作品の転写が盛んに続けられたようである（各地文庫などの蔵書調査の印象）。

次に、『石田軍記』の記事を示し、脱戦後期に成立した軍書の叙述法の一例とする。

○（石田三成が、東軍参加を考えていた美濃福束（＝岐阜県安八郡輪之内町）城主丸茂三郎を西軍へ誘う）偏ニ西軍ニ一味シ、戦功ヲ励サレ候エカシ。有レ左ニ於テハ恩賞ハ宜ク望ニ応ズベシト委細ニ示シケレバ、丸毛モ欲心ヤ起リケン、少モ辞退セズ、金鉄ノ好ヲナシケルコソ^{おろか}恣ナレ。《略》今ノ人、金銀ノ賄ヲ見テハ非モ理ニ取成、帛色ノ重キニハ親子ヨリモ大切ニ思ヒテ、義ヲ忘レ忠ヲ不レ顧。《略》富貴ヲ取テ万民ヲ捨ハ天下ノ主ニ非ズ。強勢彊暴ヲ以テ天下ノ主ナリト云ハ、豈桀紂ニ異ナランヤ。明君ニハアラズ。天下ノ君ノ心、正ニ是ニアルベキコトナリ。只万民豊樂ナレバ、天下ハ自太平ナランカシ。丸毛奥州エ赴ク志ヲ引替テ、石田ガ勸ニ従ヒ《後略》『石田軍記』六 元禄十一年刊。引用は架蔵明治刷本による）

右文中、「今ノ人」と書くことで、過去の話題ではなく、当代の話題である、と読者を引こみ、「天下ノ主（君）」についての論も、同じく当代の話題であることを悟らせる。丸毛某は「天下ノ主」どころか「一国ノ主」でさえなく、政道論はいかにも押しこまれた感がある。また、政道論の部分が終ると、忽ち丸毛の話へ唐突に立ち戻る。あまり手の込んだ偽装工作ともいえないが、絶板書の仲間入りも当然であろう。戦いの記録を装いながら、作者の意図が別にある、となれば、「軍記」としては衰弱せざるを得ず、歴史・政道の論は、また別の舞台に移る。「軍記」の歴史は概ね享保二七（一六八六）の頃まで、とし、本稿もこの（内イ）をもつて終章とする。

（以上）

*本稿は、平成三十年六月七日開催の京都女子大学国文学科公開講座での講演（軍記史の終章）に基き作成した。

＊ ＊論文・著書等の刊年につき、元号・西暦は奥付に拠った。

軍記史の終章まで